

「幸吉の旅」

東京女子高等
師範學校教授

岡田みつ

三

上手に采配さいはいを振つて、幸吉は、ステーションのすぐ裏の土手に部下の軍勢を集合させた。そこでブリキ罐かんだの貝殻かいがらだのを掻き除けて、手車の納まるだけの場所を作り、さて自分はポチを足許あしごに丸く蹲うづくまらせて、これからの策戦さくせん考へた。

彼は搖らいでゐる頭髪かみからぼろ帽子ぼうしを押しやつて、兩手に膝ひざを抱かかへて、前面まへに聳たえてゐる煙突えんとつ、遠くに見える白帆しろふんの船ふねをじつと眺めてゐた。その眞面目まじめな眼には大人ほどの眞劍まけんさが閃ひらめいてゐるし、陽光ひかりを受けたその一圖いちずな顔付かほづには、人間らし

さが消えて、神々しさが現はれてゐた。こんな子に父親ちちがあつたら、これが我子わがこだと自慢こゝろに胸むねを躍おどらせてその重おもすぎる肩かたの荷物にものを受取うけとつてやつたらうに！

森山もりやまお房おふさは死ぬかもしれないと他人たにんが噂うわさをするのを聞いて以來いらい幸吉は菊嬢きくぢやうに家うちと「母ははちゃん」とを見付けてやらうとの願ねがひを掛け始めたのだ。自分おれは以前いぜんにホームと名のつく公こうけの建物たけものに居ゐた事ことがあるが、菊嬢きくぢやうには、ちんまりした小さな「お家うち」といふものがやりたかつたのだ。

ブリキ罐かんと貝殻かいがらの中に坐まつて、ポチと菊きくちゃんとを眺ながめながら、幸吉は過去こゝろのさまざまの事ことを思おもふ。

ひ浮べて見た。至つて手短かな過去なのだが——
 大きなお船に乗つて長く旅をしたつけ、それから
 何日もく長く病氣に罹つて……何ヶ月も経つた
 のだつたかしら……その時だつた髪を短かく切つ
 てしまつてそしてみんな何かを忘れてしまつたの
 は。さうしてその次が孤兒院で——そこへお房が
 連れに来て——それから、あの嬉しいく事があ
 つたんだ——そら菊ちやんが居たんだもの。それ
 からあの厭な湊小路の家——と、これだけ思ひ出
 すのに暇はかゝらなかつた。

幸吉は貯金箱を破して見た。中には、嬉しや財
 産が一圓八十五錢あつた。豫想外だつたので、彼
 はアハ……と笑ひ出した。するとポチが尻尾をち
 ぎれるかと思ふほど振りに振つて、手車に跳り込
 み、とうく菊ちやんの目を醒させてしまつた。

これこそ楽しい一家のまとゐで、これから揃つ
 て田舎へ行くのだ。御飯や宿の事は覺束ないが——

——そんな事は些細な事なのだ——青いく草原へ
 行つて幸吉は、ほんとの鳥が樹の上で啼くのを見
 くんだし、菊嬢はそこらの花を摘むんだし、ポチ
 は？ 大方好味さうな野鼠か栗鼠でも捉へるのだ
 らう、菊嬢はもう今から有頂天になつて居た。こ
 の幼兒の心には過去に對する執着も、現在に對す
 る苦勞も、未來に對する憧憬もなかつた。

唯目前にあるものだけが天地なのだから、この
 陽の射してゐる六月の朝、ふと眼に映つたのが湊
 小路のいつもの光景でなく、貝殻やブリキ罐のあ
 る土手だつたのが分けても悦ばしいのだつた。

朝御飯がまづ第一。

都合よく近くにポンプ仕掛の井戸があつたし、
 牡蠣殻は手頃のコップ代用になつた。菊嬢がお煎
 餅を三枚貰ひ、幸吉が二枚、ポチが一枚。水には
 何の制限も無かつたので、銘々飲みたいだけ飲ん
 だ。

その次が化粧といふ事になつた。幸吉は汚れたハンケチを手拭にして、井戸の水で濡らして、菊ちやんの顔と手とを優しくゴシ／＼擦すつた。それから菊ちやんの著物の皺を伸ばした。清淨な前掛はいよ／＼未來の母ちやんがこの子に面會するといふ際まで大切に仕舞つて置くことにした。

こんどは櫛を取り出して、菊ちやんの金髪を行儀よく梳き並べてやつた。それから他所行の帽子を被せてやつていよ／＼御化粧が出来上つたのだつた。

幸吉とポチは、井戸端へ行つた。幸吉はポチをポンプの口の下に入れて水を掛けた。ポチには始めての、しかも好ましくない經驗なので、こんな事なら脱走隊に加はらないで、「汚れ」が粹だとされてゐる地に居ればよかつたとさへ考へた。幸吉が手を離すと、ポチは一どきに清潔になりすぎたせいにか少し氣が變になつて、グ／＼七十回も

止みなしに身體を廻轉させた。そのおかげで、毛がすつかり乾いてしまひ、菊嬢は可笑しがつてその揚句手車は窮屈だから降ろしてくれといひ出した。

幸吉は、いつもの通り自分の事は一番あと廻しにしてこれから顔を洗ふのだつた。ポンプの下に頭をやつて、顔と手とを氣がすむまで擦つてそして拭いた……可で拭いたつて？ さあ——とにかく拭いたといふ事が肝心なのだから。あの先刻のハンカチ風のもは菊嬢を洗つたらもうペト／＼になつてしまつたのだし——幸吉は髪を梳き、靴下を引上げ、靴の紐を結び直し、ジャケットのボタンをはめ、帽子の裂けたところをピンで止めようとしたら、丁度そこへポチが鳥の羽を一つ啣へて來たので思付いて、それをブラシにして塵をすつかり拂つたのだつた。さて自分のが終つてから平民的な幸吉は、その櫛でポチの毛を梳いてやつ

た。するとポチはワン／＼吠えたてゝ、こんな目に遇ふ償には、甘い鼠を授けたまへと神様に祈つてゐたらしい。

八時近かつたので一行は土手を降りて停車場の横手入口から入つていつた。

驛では仕事がとくに始まつて、ちきまり通りざわめき渡つてゐた。箱や樽を山と積んだトロツコが通る。驛夫が荷物をドダンバタンと甲の車から乙へと移してゐる。幸吉は、菊嬢が他所行き帽子姿で得意がつて納まつてゐる手車を曳いて入つて來た。ポチは、小ざつぱりと、けれども悄然として後からついて來た。幸吉はひとの邪魔にならないようにして通つたので、誰も文句をいふものはない。それから高い黒板の前に進みよつていつた。その板には驛名が金文字で並べて書いてあつた。

一驛の名前——後へ行くほど好い名だな。一番あ

とのが大變きれいな名だから、そこへ行くことにしよう」

と幸吉は、あぶなつかしい撰擇の仕方だとは氣が付かないでさう獨語を言つた。縁川驛は感じはいゝ名だけれど、ひよつとしたら鬼塚驛の方に心の優しい人が居るのかもしれないのだつた。

菊嬢は「縁川」がいゝと言ふしポチも賛成したので、幸吉は停車場からずつと歩いて野天のプラットホームへ出た。そこには發車するばかりの汽車があつて、先頭の機關車は、喘息病のやうにブツ／＼と呼吸をはづませてゐた。

車の傍に、紺服金ボタンの親切さうな男が立つてゐたので、幸吉は、思ひ切つて

「縁川まで何錢ですか」と訊いてみた。

「これは貨車だよ……縁川までは四時間かゝる。

十時四十五分まで待つ方がいい。驛へ行つて切符を買つてネ」とその男が答へた。

「十時四十五分！一幸吉は安婆さんが、菊嬢が居なくなつたので、急に惜しくなつて、追かけて来るやうな氣がしてならなかつた。菊嬢は車からよち／＼降りて、待ち切れないといふ風で、

「菊ちゃんは、今すぐ乗んのするの。すぐよ！
すぐよ！」

と呼び立てた。幸吉は泣きさうな顔になつた。

「もつと早く行きたいのか。大分大勢連れだから、ぢや一緒に連れてつてやらうか。オイ、金子！そこ開けてこの子供達を乗せてあとを閉めて置け。修繕に終點まで持つて行く車なんだよ。だから無賃で君達を乗せてやる」

と、先刻の男は言つた。この人は、親切氣がありすぎるからとても金儲けが出来さうもなかつた。

幸吉は、出来るだけ丁寧にその人に御禮をいつた。菊嬢は、涎のついてゐる御煎餅をその人に無理に進めた。

ポチが嬉しさに吠え立て、乗りこまうとしたので、その男が、

「ヤア、犬も連れて行くのかい？ こいつあんまり綺麗でないネ。犬なんかぢぎに手にはいるよ」と言つた。

「だから連れて行くんです。きれいでないもんで誰も可愛がつてやる者がいないから」

と幸吉が答へた。

ポチは御腹ん中で、

「失禮な言草だけど——何でもいゝ、一緒に行けさへすれア！」と思つてゐた。

「ぢや、いゝから、さ、乗つた／＼、みんな。無賃で、素的に面白い汽車旅行なんだぜ！ もう發車していゝつて言つてくれ、金子君」

汽車は驛から出た。親切な男は、子供達が見えなくなるまでハンケチを振つてゐてくれた。

彌平爺ぢやうぢさんは森崎といふ村まで行つて來ての歸りだつた。爺さんは年中手に餘るほどの仕事がありながら急ぐといふ事をしない男で、馭してゐる馬の「お玉」も緩くりとしたもので、草のよい匂がするとそこまですてノコノコ踏み込んで行つて食べたりしてゐた。

彌平爺さんは、外見みかけでは、加藤のおかみさんの使にいつた譯なのだが、もう六年もこの男を使つて見たおかみさんは、爺さんを使に出せば行つて歸つて來るのに一日かゝる（行先の遠近は問題にならないので）ときめてしまつてゐた。

爺さんの特徴は、加藤のおかみさんに尋ねるまでもなかつた。その顔と姿と言語にちやんと現はれてゐるから、たとひ通りがゝりの白痴ばかだつて判定し損ふことはなかつた。背のひよる高い、くの

字脚のしまりのない男で、お千代婆さんに言はせると、もつとくひよる長くなるところを足先のところまでやつと曲つて助かつたのだと。へち千代婆さんは森崎村と緑川村との家を廻り歩いて着物の仕立直しをする女で、口も八丁手も八丁なのでこの人の皮肉な言草は兩村にぢぎ傳はるのだつた。

彌平爺は赫あざつ毛で頬骨が高く、善良さうな眼でそれに天下一品といふ鼻付をしてゐた。何と形容したらいか分らないが、とにかく幅がひろくて低くて、風通しよく空をむいてゐて愛嬌があるのだつた。だからお萬さんは「彌平ぢいさんがあんなに風を引くのは、顔をいゝ工合にかしげで置かないと、雨がみんな中へ入つちまうからだ」などゝ悪口をいつたものだ。

その口と來たら顔に付いてゐる大きな「切れ目」といふだけ。口のそも／＼の目的にはかなつて居るだらうが、どうも飾りといふ役はつとめてゐな

かつた。お仙が——もう今は亡くなつたが——この彌平のとこへ嫁に来る事にしまつた時、例のお千代婆さんが「どうして、まあお仙さんはあの彌平どんの口を我慢する氣になつたかしら、口ん中へ入らうと思へば造作ないし、口の周圍を廻らうと思へば暇さへかければ出来るけれど」と批評した。でもお仙は彌平の惡口をいはないその口、短かつた夫婦の生涯にいつも優しい言葉ばかりかけたその口をよいと思つたのだらう。

彌平爺さんがつひ五六分前に荒物屋の前を通つたら惡戯つ子が「オイ爺さん驛のそばを通る時にや口をふさいであげ。汽車が入ってくるかもしれないぜ」と怒鳴つた。爺さんは穩かに微笑しただけだつた。これも以前からの惡口なんで、その味がやつと近頃爺さんの頭腦にとつくりと染み込んだ譯なのだ。けれどもぢいさんの「怒り」の水漕がちいさくて、給水の管が不十分だから、爺さん

を怒らせることはとてもむづかしいと村の人はいつてゐた。

爺さんは可なり學校の教もうけたのだつた。一人息子だつたので親は相當なものにしようと思つたのだからうまくいつたかも知れないのに、彼の言葉によると、始終暇がなくなつて、とうとうものにならなかつたのである。村の小學校に十四まで行つてゐたが行かずにおられるかぎり怠けてその後だけ通つたのだつた。小學校を出てからは三哩から離れた中學へ行つてゐたが學校へ往復して夜までに宅へ着くのがとても無理だといふ事が母親に分つたので學問の方は廢止で、家で稼業の手助けをすることになつた。それがまた例のやり方なのでかれが毎朝島に出かける時、父親が辨當箱を渡してくれて、目に涙を浮べて、どうぞ日没までには戻つて来てくれるといつて別れを告げたといふ程であつた。

さて、今、彌平爺さんは刻み煙草を吸ひながら、あたりの景色を眺めようともせず、ぼんやりと馬車を進めてゐると、馬のお玉が路の片方へ歩み寄つて、先方からやつてくる行列「洗濯籠にのつてゐる赤ん坊と見知らぬ少年と變な犬と」に路を譲つた。

爺さんは子供が好きなので、興ありげに靜かに眺めてゐたが、口から煙草を離して、ゆつくりかんとした調子で、

「どこへ行くんだ、エ？ 沼の方が深瀬の方が」
幸吉は、沼、深瀬、どつちも好ましくないと思つたけれど、深瀬の方がまだいゝと思つて 深瀬の方 と答へた。

「おらもそつちへ行くんだ。行きさへすれアいゝのならこれへ乗つて行きなさい。緩くり行くのでかまはなけれア。お玉もおれも急ぐなア嫌ひだ。何でもゆつくりとゆつくりつていふんだ。お

前の連中、こぼさないで乗せられるかね。

爺さんがさう言つたのも無理はなかつた。菊ちゃんかやたらにはしやいで少しもぢつとしてゐなかつたから。

「あたゝい菊ちゃんを持ち上げるから、小父さん受取つて下さい。馬きつとぢつとしてゐる？ エ

小父さん？」

「大丈夫、ぢつとしてゐる。お前が乗る間、ちやんとしてゐるよ、乗つちまつてからだつて随分ぢつとしてゐる。ぼんとはナ、お玉は歩くより立つてる方がずんと好きなんだ。お玉は人を乗せて逃げるなんてことはしない。何でもそのまゝにつて奴さ。さ、乗りな、そら來た！ その手車は馬車の後に載せて。さうすれア ちんまりしてガタともいふ事ぢやない」

幸吉は純真な心で、これは今朝の御祈を神様がさゝ届けて下さつたのだと思つて、自分がどうの

かうのと指揮ましづをする考をすつかり捨て、馬車が川に沿うてゴト／＼ゆくに任せてゐた。

菊嬢は、彌平の大きな手から下がつてゐる手綱の端はしをつかんで、自分がお玉を馭してゐるやうな氣になつて、口もきけない程に悦びきつてゐた。

ポチが栗鼠を捉へたいとの空想もまんざらうそでもなくなつて來た。かれは林の中に駆け入つたりまた駆け出したりして跳り狂つてゐた。萬一湊小路のあのみじめな所へ歸る事があつたら、あそここの犬仲間いぬなかいに、不思議な世界の話を何といつてきかせようかと考へてゐた。

川の對岸の草原には、黄色のバタカップが、派手やかに咲き擴がつてゐるその中を花菖蒲がそこ／＼に紫に斑點をつけてゐた。

櫻の樹は一面に雪白の花を戴き路端には雛菊が草の中に雜つてよい色彩いろざつをしてゐた。この中を緑川が橋や、堰や、水車に妨げられながら海へ海へ

と流れてゐるのだつた。

と、俄に、彌平爺さんが手綱を菊嬢の手からもぎ取つた。

「さ、大變だ！　おら、星野の後家さんを、お千代さんとこの腰掛に待たせたまゝで置いて來てしまつた。おら歸りによつて乗せて戻つてやると約束したんだ。荒物店の前通るときに餓鬼らがおれをいぢめやがるので、急いで通つたせいだ、だから角かどへ來ても逆上のぼしてしまつて曲らないでドシ／＼來ちまつたんだ。いそげば廻れ！　とは巧いいつたもんだ。さ、降りてくれ、みんな。もう深瀬までは五六町だ。膝栗毛に乗つて行きなさい。」

さう言つて、爺さんは、あつけにとられてゐる子供達を路の中央まんじやうに降ろして、柔順やさなしい馬を向き直させて星野の後家さんを連れに四哩戻つていつた。

あんまり事件が思ひがけなかつたので、菊嬢は泣きさうになつてゐた。幸吉は花を手に一杯摘み取つて菊ちやんに與へ顔の汚れを拭いて、清な綿木綿の前掛をかけさせ、手車に乗せてやつたので菊嬢はぢきに眠つてしまつた。

幸吉は葉の茂つてゐる林の中を車を押し／＼歩きながら少し心配し出した。こゝまでは何もかもよい都合に行つた。實際思つたよりもうまく運んだのだ。足が何だか重くて、御腹がからつぽみたやうなのは疲れたせいかも知れない。朝出た時には菊嬢の「母ちやん」になる人があらゆる窓からさし招いてゐて、どの人に定めていゝか分らないのだらうと思つてゐたのに。今となつて見ると母ちやん」といふものが一人のこらず世の中から居なくなつたやうに感ぜられた。

ぢきに村が見えて來た。幸吉は勇を鼓して歩いていつた。兩側の家を一軒／＼眺めるけれどこゝ

どといふのが見當らなかつた。どうも大通りは家と家が近すぎてそして往來に接してゐるからと考へて、彼は態々大通から外れて楡の木が双方から枝をさし交してゐる路へ車を向けた。ポチも尾を低く垂れて、さま／＼の誘惑に目もくれず、踏み固めた路を一心に歩いてゐた。二疋猫が居たけれども一言の悪口もいはぬポチの様子は如何にもホムシツクにかゝつてゐるらしかつた。

「あゝ困つたナ。どこのうちも何だか變だ。繪に描いてあるやうな鳩の家もないし花の咲いてる庭も、雛鶏もない。窓に婦人が居たり、赤ちやんの衣類が干してあつたりもしない。これぢやとても……」

と思つてるうちに、大きな白い家が、今まで樹で隠れてゐたものか、急に眼の前に現はれた。幸吉は、汚點一つない柵に近づいて、美しい前庭、横庭に眺め入つて——と眼ですつかり氣に入つて

しまつた。

何から何まで注文通りだつた。果樹園があつた。――まあ嬉しい！ 青い林檎が山ほど實つてゐた。樹の下には面白さうな砥石があり、また別の樹の下には、青塗りの椅子と腰掛があつた。それからすぐりやグーズベリーの木があり、七面鳥が不器用な恰好をして納屋の中を歩いてゐた。幸吉は、深い草の中をそつと履み歩いて、井戸と水漕の前を通り抜けて横手の縁側の見えるところまで来た。そこには女が一人華やかな色の切をいぢくつて縫物をしてゐた。磨き立てた一列の鍋が陽の光を受けてキラ／＼チラ／＼光つてゐた。蟋蟀が暖い草の中で眠さうに鳴いてゐると、ちいさい黄蝶がいくつとなく香の高い花葵の上を舞つてゐた。

縁側にゐた婦人が急に聲高々と陽氣な唄を唱ひ出した。幸吉は暫時ぢつと聴きすましてゐたが、かれの目は庭の小蔭の樹の下に小さい大理石の板

石が立つてゐるのに移つた。幸吉は、

「田舎ではこんなところに名札を置くんだな。あの女の名だ。加藤まさと彫つてある。あの女の人の名前なんだ」と思つた。

彼はソツと家の正面へ廻つていつた。そこにも花壇があつて白い可愛い猫が段々の上で眠つてゐる一人の女が明いた窓のところまで編物をしてゐた――もしかしたら菊ちゃん「母ちゃん」になるひとかも知れない。この人を見たら、幸吉の心臓が堪へられないほどどき／＼して来たのでかれは菊嬢とボチとが一緒になつてぐつすり寝てゐる手軍のあるところへよろ／＼と歩き戻つた。かれは菊嬢の顔を心配さうに熟視して、ポロに近いハンケチに唾をつけてその鼻の端についてゐる泥をこすり落として、さてその車を曳いて家の門に通じてゐる小路を通つて門を開けて中に入り段々を登つて案内を乞ふた。どうぞ入りといはれる事と子供心の正直さで信じきつて待つてゐた。(つゞく)